

博士學位論文審査結果の要旨

学位申請者氏名	北條 暁子
論文題目	平安・鎌倉時代文学の出産—母子・祖父と政治
論文審査担当者	主 査 大谷 俊太
	審査委員 坂本 信道
	審査委員 中前 正志
	審査委員 田淵句美子

本論文は、平安・鎌倉時代文学に見られる出産・誕生に関わる場面の叙述を対象として、当時の日記・古記録類から関係記事を渉猟し、御産の儀礼や慣習など皇子女の誕生や後宮女性の御産の実態を歴史的に明らかにしつつ、それらと突き合わせることで、政治的意味合いをも踏まえた叙述部分の解釈を行ない、その作品内に於ける意味付け、さらにはその表現の持つ文学史的意義について考察を行ったものである。また、「出産」の対になるものとしての「死別」についても、『長恨歌』撰取による帝の亡魂探訪の和歌を考察し、文学史上への位置付けを行っている。

本論文に於いて先ず注目すべき点は、御産というテーマの重要性である。命を生み出し命を迎える出産には、祝福の期待と難産あるいは死産の不安と危惧が表裏する。文字通り命に関わり歓喜と絶望がその一点に集約するテーマであるが、本論文が対象とする日記文学・物語文学・軍記物語に於いては、御産は皇統の問題・家の問題であり頗る政治的・社会的な事柄でもあった。また、その背後には日本人の死生観・靈魂観の問題も広がる。申請者もその重要性に十分自覚的であり、そのような深刻・深遠なテーマを選び得たこと自体が評価に価するということもできよう。

が、何より、本論文の特長は「御産部類記」などの古記録類を網羅的に収集しそれぞれの史料を丹念に読み解くという研究の方法の周到さと堅実さにある。出産・誕生に纏わる儀礼と慣習を調べ上げ、現代的な先入観を排して当時の御産の実態を具体的に把握した上で、出産を巡る儀礼・慣習に於いては「後見（人）」が可視化するとして、出産の社会的意義を、新たな登場人物を受け入れる社会との関係性の構築であるとしたのは、御産の考察に有益な視点の獲得であると考えられる。

例えば、第四章「臍の緒を切る母——『古事談』と璋子への評価再考」に於いて、待賢門院璋子が崇徳誕生の際に自らが臍の緒を切っていることに、璋子の激しい気性の特異さを読み取り、かつ『古事談』に見られる崇徳が不義の「叔父子」である説の可能性を示唆した先行研究に対して、古記録・物語に見られる御産の記事を検討し、

臍の緒切りの担当者の優先順位を明らかにした上で、璋子の行いが当時の例に則ったものであることを示し、先行説を刷新し得ているのは顕著な成果であると言えよう。そして、この事例は、上皇が、生れてくる皇子の父方母方双方の尊属となり得たことから生じた院政を象徴する事象であるとの意義付けは、院政を理解するための一つの有用な指標ともなり得るものと思われ、確かな考証がもたらす本論文に於ける考察の射程の長さを示してもいよう。

さらに、以上の史料に基づく考証を単なる事実の羅列で終わらせることなく、獲得された政治的・社会的な意義付けの枠組みの中で、上記の知見を文学作品に還元して、作品の解釈、文学史的意義付けにまで繋げているところに、本論文の本領が発揮されていると言える。

例えば、第五章「誕生を祝う父——記されない後白河院御幸」に於いて、後白河院が祖父白河院の鳥羽誕生時の「康和の例」に倣ったことを、吉例と見做しての先例主義とのみ捉えるのではなく、それを真摯な祈りの一つの形であるとするところ。

また、第一章「誕生を慶ぶ時——『紫式部日記』御産叙述再考」に於いて、史料の考証から誕生・性別の公表は後産完了を待って行われたという慣例を導き出し、先行研究では時間経過を無視した記述とされていた場面を、時間の経過に沿って実況中継のごとくに描いたとしたところ。すなわち、『紫式部日記』の叙述を、後産が完了し男児であることを知った人々が心通わせた安堵と慶賀の瞬間を溢れる臨場感で以て描いたものであるとしたのは、作品の読みを鮮やかに更新するとともに、作品自体を女房による記録文学としての評価に堪えるものとする重要な指摘であると言えよう。

第三章「臍の緒を切る父——古本『夜の寝覚』再読」では、父親の男君が臍の緒を切る行為を、先行研究が「先例がなく、それ相当の覚悟と用意があつてのこと」「抑制を欠き、常軌を逸している」「かなり特異な場面」とするのを、史料の考証に拠り臍の緒を切るのは新生児の父親の本来の役目であるとした。その上で、当然のことが物語に殊更に書き表わされた理由を問い、三人目の子にして初めて父として後見する立場であることを公表できることを強調するためとするのも、人物造型、作品の解釈にまで言い及んだ例と言えよう。

以上、いずれの章に於いても、緻密な考証と論旨の展開が見られる一定の水準を超えた論文であると評価できる。

ただ、「Ⅰ 出産」の部と「Ⅱ 死別」の部の分量的不均衡と内容の接続の不足、『とはずがたり』を扱う章と終章が、他の章に比べてやや密度と完成度に違いがあること、厳密で網羅的な考証が却って事例の羅列と晦渋な文章に繋がる向きがあることなどの不備も指摘できる。また、物語・日記文学と古記録の事例とを等し並みに扱うことへの配慮は為されてはいるが、物語は勿論、古記録類もやはり選ばれて後世に伝わるものであり、各々に個別の事情をより慎重に勘案することが求められる。加えて、平安期・院政期・鎌倉期と時代を分けて論じたにも関わらず、時代による変遷の指摘が物足りない点も惜まれる。

しかし、上述のように、御産という興味深く重要なテーマに於いて、緻密な考証で

先行研究を刷新し、作品の解釈に還元した本論文は、十分な説得力を持つ好論である
と言えよう。

以上により、審査委員一同は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに適格である
と判断する。